

新型コロナウイルスのこと ⑥

常磐病院院長 新村浩明さんのはなし

当分、三密を避ける生活を続けてほしい



院内感染が一番恐れる事態なので、とにかく新型コロナウイルスを院内に持ち込まないことです。入院されている患者さんは高齢者が多いので、感染すればどうしても重症になるリスクが高いですから、持ち込まない対策を工夫しています。

具体的には、通院の患者さんや家族など外から来る人は、入口でアルコール消毒液を手指につけている間に、サーモグラフィで体温を測っています。入院している患者さんと家族の面会は禁止されていて、病状など家族の説明は病室とは別なフロアで行い、患者さんの具合が悪くなった時は個室で面会してもらっています。

院内感染をした原因を探ってみると、職員は食堂や休憩室での感染が多かったようなので、職員食堂では会話禁止を大原則にしています。ウイルスは手を介して感染が広がるので、手すりやドアノブ、パソコンのキーボードなどの定期的な消毒を、これまで以上に徹底しています。

この病院は透析の患者さんが五百人ぐらいいます。発熱などコロナの疑いのある透析の患者さんはよその病院にお願いできないので、感染予防の対策をして診察します。ときわ会グループの病院がいわき

市内には常磐、磐城中央、小名浜中央の三つあるので、四月下旬に小名浜中央をコロナ専門病院に変えました。

自前の発熱外来です。あくまでときわ会関係の患者さんだけです。が、緊急性がそれほどなく、熱が出ているかかりつけの患者さんと連絡があった人は、小名浜中央病院で診察します。そうすることで、ほかの外来の患者さんとの接触を避けます。

それから、外来の狭い空間で診察を待っている間の患者さん同士の接触を避けるために、なるべく車で待機してもらい、順番になったら携帯電話に連絡して院内に入ってもらっています。外来の待合室の長いすも、間をあけて座ってもらっています。

常磐病院には僕を含め、単身赴任の医師がたくさんいます。常勤の半分以上は単身赴任で、家族がいる東京との行き帰りをどうするか、ということもありました。基本的に緊急事態宣言が出ている間は東京に帰らず、精神的にストレスが溜まりました。

非常勤の医師たちも東京からが多いですから、向こうから「僕たちがそちらに行っていないのですか」と聞いてきたり。所属先の病院が外勤禁止のルールを作り、こちら

はあてにしていたので、急に東京から来られたくなって困ったことがありました。いまはすいぶん緩和されて、医師たちも来られるようになりました。

四月後半から五月初めぐらいは、かかりつけで症状が変わらない患者さんは、希望があれば電話診療もしました。健康状態などを聞いて薬を処方し、院外の薬局に行っているいただきました。一日に二十人ぐらいですかね。いまはほぼゼロで、みんな安心されて病院に来ています。

たまたまクラスター感染が起きたのが常磐鹿島工業団地の会社だったり、またそれは別な感染者の家族がこの地区の保育園や学校と関係していたりして「そういう患者さんが常磐病院に入院しているのですか」と、問い合わせがありました。

同じ地区で、うちの職員もたくさんいるので、職員の子もたちもいるのでひやひやしました。もしや職員から感染者が出るのではないかと、通院している患者さんもどこかで接触している可能性があるものではないか、と。

さいわいにもさういってはいませんが、北九州のようなことが起きてもおかしくないですから、実に怖い。目に見えないですし。



き市で例えば五十人

要だと思えます。

ある意味、どんな対策をしても入り込む可能性はあります。
老人ホームは絶対に入れないという厳格な対策をとっています。家族も入れないし、持ち込むものは消毒して。しかしこの病院は非常勤の医者やスタッフも多いため、患者さんの家族が院内に入らないということもできないし、入院患者さんは毎日変わりますし、すべては管理しきれません。
ひやひやしながら、何か疑わしいものがあれば検査する。これまでに熱が出てコロナを疑うような入院患者さんが十人くらいいて、PCR検査を受けました。もちろんコロナではありませんでした。

コロナの専門家はいわき市内にいません。この患者さんは普通の肺炎だろう、この熱はコロナとは別の熱だろうなど、なかなか区別がつかないところが怖いです。いわき市医師会でも理想の形を議論

しています。

コロナを疑う場合、まず保健所の帰国者・接触者相談センターに電話をして、そこでPCR検査が必要と判断されれば帰国者・接触者外来に誘導され、検体を採取しています。しかしその手間が面倒で、現場の医者が「PCR検査をしたい」となった時に検査ができるよう、PCRセンターをつくらうとしているのです。

場所は、保健所のいま発熱外来を休止した休日夜間診療所ですが、看護師の手配が難しいようです。全国どこでもそうでしたが、以前は問い合わせが多くて、なかなかPCR検査を受けられませんでした。でも、いまは問い合わせ件数も減り、いわき市内に限れば本人や医療機関が連絡すれば、検査を受けられるようになっていきます。

次にコロナが流行した時の対策の準備がまだまだできていません。

いま、病院のなかでPCR検査ができるように、検査薬の取り寄せなどをしています。常磐病院には先端医学研究所という遺伝子研究所という部署があり、PCR検査装置も備えてあるので、検査薬などを準備して、いつでも検査ができる態勢にはなっています。

それから第一波はこの程度で終わりましたが、第二波は感染者がもっと増えるかもしれないという話もあります。いわ

の感染者が出たら、医療センターの後方支援病院としてあたらなければならぬですから、その受け入れ準備です。

コロナの患者さんを受け入れるとなると、僕たちが患者さんから感染しないように、タイベックス(防護服)を着て、N95のマスクをつけ、全職員が脱いだりはずしたりできる準備をしておかないと。原則、小名浜中央病院での受け入れを考えていますが、数によって非常勤の医者でも受け入れる必要が出てくるかもしれませんから。

スタッフが医療センターに見学に行き、マニュアルも借りました。練習もしていますし、精神的にも前とは違いますから、もっと具体的な協力ができます。県が東横インいわき駅前を借り上げて設置した、軽症者の宿泊療養施設のオンコールデスクターにも、ぼくを含めて三人が協力しています。

千葉県の知的障害者施設でクラスター感染が発生しましたが、施設や老人ホームで多数の感染者が発生した場合、それが医療スタッフとして入り込むのか。漠然とした不安があります。例えば、認知症のお年寄りがたくさんいる施設で起きてしまったら。そういうのが怖い。そうならないことを願っています。

三密を避ける生活は、ずっと続けるの願いをしていくしかありません。何十日も感染者が出ない「いわきは大丈夫」と思っていないです。でも人はいろんな所から入りしていますから、いつウイルスが持ち込まれるかわかりません。ワクチンや治療薬ができるまで、三密を避け続けることは当然、必要だと思えます。